



— 巻 頭 言 —

核医学技術の伝道は未だ道半ば

大阪市立大学医学部核医学画像研究開発センター
日本メジフィジックス株式会社 仁井田 秀 治

第27回総会学術大会は盛会裏に幕を閉じました。メインテーマ「一」は「物事の始まり、原点に帰って出直す等の意味合いである」と杉林実行委員長は述べています。さらに「最も優れた、最善、一つのものの全体」などの意味もあります。核医学技術という道具をすべての技師、すべての医師、そしてすべてのメーカー関係者が、情性を廃して今一度再確認し、真に医学に貢献するものへ、患者様に役立つものへ熟成するスタート台に立ったともいえます。特に、学生限定講習会や核医学技師教育を考えるシンポジウム、日米韓の教育制度、卒後教育プログラム等、核医学技術の伝道の重要性をアピールする内容が目につきました。一方、患者様に核医学を理解していただくための市民公開講座は、ラジオパーソナリティ妹尾氏の軽妙な司会により、時の経つのも忘れるほど楽しい内容でした。学生講習会に213名、市民講座に461名の多くの参加があり、学会参加者も636名という数字が物語っています。実行委員会をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

さて、この稿のタイトルとしました「核医学技術の伝道」に関して、正直その道は未だ半ばを過ぎたあたりと考えています。たとえば、日常のカメラ QC に始まり、薬剤の調整、投与の準備と介助、前処置や投薬の制限、患者様および術者の被曝管理、核種や投与量と投与のタイミングに合った適切な収集条件の作成、カウントをベースとした適切な処理条件の実践、検査部位ごとの画像表示条件の適正化、フィルミング時の画像の適正化、PACS 送信設定、モニター診断への対応、各種定量評価の準備と実践、統計学的解析への対応、カメラ更新時のメーカー対応、薬剤変更における各種条件設定、薬剤管理と届出、検査台帳、業務統計……思いっただけでもこれほど多くの内容を後継者に伝承する必要があります。さらに、CT や MRI 等の他のモダリティに比べて、主観的な処理項目が多い、言葉を変えれば技師の経験や知識により結果が左右されるのも核医学の特徴です。ベテランの技師であっても知識の習得を怠れば、自己満足に陥れば最善のゴールは隠されてしまう。生涯学習これに勝るものは無いといえましょう。

昨今、社会人技師の大学院入学が多くなってきています。高度な知識を習得するというよりも、自ら学ぶ研究する場、指導者を求めての入学が理由でありましょう。それならば、博士号を取得することが最善ではなく、生涯学習すること、核医学技術の伝道師になることを目的としてください。また、核医学専門技師試験をきっかけに自己の知識を再確認しようとする動きも目立っています。放射線取扱主任者試験にチャレンジするのもよし、これらは確実に核医学技術の底上げに寄与するものと考えます。

最後に、私事ではありますが平成7年に当時の編集委員長藤田先生のもとで委員としてスタートしました学会関連業務も、高坂先生、増田先生の厳しい指導を経て、理事を2期4年、定量化・基準化 WG 担当4年、監事を1期2年務めさせていただきました。そろそろお払い箱と自覚しています。今後は、技師の経験、薬剤メーカーの経験、学会活動に参加した経験を活かして、微力ではありますが核医学技術の発展に努めてまいります。大阪市大医学部画像センターでの技術研修も4年目を迎え、延べ150施設にご参加いただきました。核医学施設の新規立上げ、機器更新、テーマ別スキルアップ研修、プロミネンス勉強会、機器メーカー共催ユーザーズミーティング等、最善のタイミングでの核医学技術の伝承は大変有効であると考えます。福喜多学会長をはじめ理事の方々におかれましても、「核医学の伝道」を加速する取り組みにご尽力くださいますよう、心からお願い申し上げます。ありがとうございます。